



訃報

富沢美恵子教授を偲んで

お別れのことば

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科長 鈴木 昭

富沢先生

先生が静謐な世界に旅立たれてから2ヶ月余、少し時間が経ちました。しかし、先生を失ってしまった私たち口腔生命福祉学科教員、学生は未だ悲しみと寂寥の気持ちを整理できないでいます。しきりに、「新年は、死んだ人をしのぶためにある、心の優しいものが先に死ぬのはなぜか、問うためだ」という詩人のつぶやきが思い出されます。

先生は、昭和50年新潟大学歯学部を卒業され、その後歯学部附属病院医員、口腔外科学第一講座、小児歯科学講座助手、そして講師、助教授を経て平成3年6月からは文部省在外研究員としてウメオ大学、アラバマ州立大学で研究に従事されました。そして平成13年4月新潟大学大学院医歯学総合研究科助教授、平成16年4月、新しく創設された口腔生命福祉学科教授に就任され、翌17年からは口腔生命福祉学科長として開設間もない同学科の充実発展にご尽力され、大学院修士、博士課程を擁する今の学科に育てあげてこられました。

先生のご研究、教育、臨床、地域貢献等多岐にわたるご活躍とご功績はとてすべてを辿ることはできませんが、先生ご自身、主な研究分野として、小児の口腔疾患の臨床病理学的研究、全身疾患を有する小児の口腔疾患と口腔管理、そして児童福祉における歯科的関与の有効性などをあげておられました。これらの研究テーマは、富沢先生の子どもたちへのあたたかい眼差し、そして医療と福祉の橋渡しという使命感の発露であったと今、あらためてしみじみ思いいたしております。

虐待を受けて育ち生きていくうえで多くの困難

な課題を抱えている子どもたちの健全な発達を願って着手された「被虐待児のセルフエスチームに寄与する歯科保健医療」のご研究からは、子ども虐待防止をテーマにしている者の一人としてももっともってご教示いただきたかったと思います。平成20年日本子ども虐待防止学会さいたま大会における先生のご発表（下写真）は、参会者から多くの関心が寄せられました。

研究者、教育者としての先生のごこのようなお考えは、医療人としてその臨床実践活動をとおした社会への大きな貢献にもつながっていきました。新潟県はまぐみ小児療育センターにおける外来診療活動、新潟県社会福祉士会理事としての社会的活躍もその一端でありました。

富沢先生

先生は、長い入院の空白期間などまるでなかったかのように退院のあとすぐさま、ご担当の授業や大学院生の指導、ご自分の研究を再開されました。以後、一日も休まずに大学においておられました。

昨年の夏は猛暑でした。まだ残暑が厳しかった頃、「今年は暑かったです。



08/11/28 Jaspacan

もあの暑さを乗り切りました。」と問わず語りに先生がお話なさったのを鮮明に思い出します。あの時に発せられたことばは、ひたむきに病に向き合うご自分に対するいたわりと褒美、そして覚悟のことばであったような気がします。しかしあの猛暑は、やはり先生のお体には負担になっていたのかもしれない。

富沢先生

多くのご指導をいただき本当にありがとうございました。

先生のお教えをもとに口腔生命福祉学科教員一同、社会に求められる有為な人材の養成と学科の発展に一層つとめていくことをお誓い申し上げ、謹んでお別れのことばといたします。凜然としたそのお姿を偲んで。



「インジャナイ」 富沢君の思い出と感謝

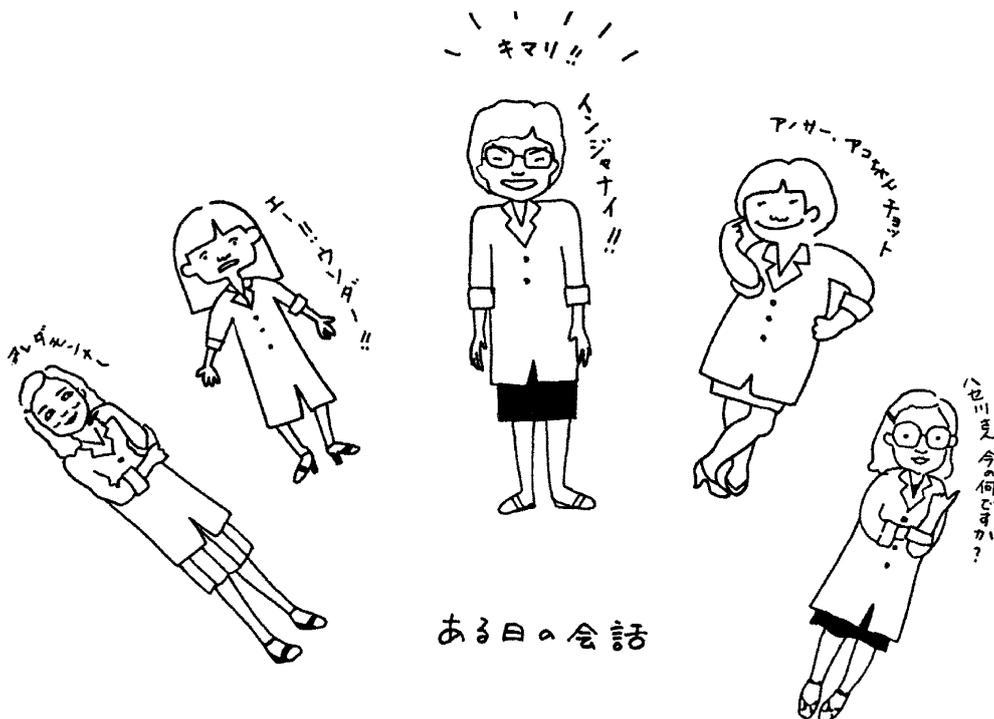
新潟大学名誉教授 野田 忠

昭和54年に新潟大学小児歯科は始まりました。その翌年の1月、口腔外科の中島先生がやって来て、小児歯科をやりたいってのがいるけど、いらんかね、と言われました。それが富沢君でした。医局員は新卒2人の状況でしたから、助手の経験のある富沢君の加入は大変助かり、出張のときも急患などの心配をしないで、安心して新潟を離れました。

僕は医科歯科の小児歯科や国立小児病院時代から、小児の口腔外科的処置を数多く手がけてきました。新潟大学でも同じように口腔外科的処置をやり、富沢君が加わったことによって、それがさらに発展し、小児の口腔外科的処置が新潟大学小児歯科の特色のひとつになりました。症例報告も数多く発表しました。新潟大学の症例報告は、他大学の小児歯科や口腔外科の小児に関する報告の多くが、1例だけの報告なのに対して、幾つもの症例を分析しての報告でした。小児の軟組織疾患などは、成人のそれとは似ているが違うところも多く、処置も違ってくるといふ、新しい知見を発表しました。

その中心を担ったのが富沢君で、彼女自身が顕微鏡を覗いていた姿を今でも思い出します。小児の口蓋に出来たポリープが、埋伏過剰歯に関係するのではないかという論文では、ゴーリン、アメリカの先天異常の本を出したりしている有名な先生ですが、その先生から、これは新しい知見で、富沢シンドロームと言いたいがという連絡があり、嬉しそうな顔で報告に来ました。これだけでなく、外傷を含めて、世界初の報告が幾つかありますが、富沢君がそういう土壌を作ってくれたお陰だと思います。富沢君の小児の口腔外科的処置は、田口君の萌出障害の咬合誘導と並んで、小児歯科の特色となりました。

富沢君が大きく関与したもう一つは、全身疾患のある患者さんの治療です。ご主人が小児科におられたこともあり、小児科と綿密な連絡を取り、心疾患や腎疾患はもとより、血友病や紫斑病、白血病やエイズの子どもも、普通の子どもと同じように治療する、これは障害児者の治療もそうですが、そういった子どもを、特別視しないで普通に治療する、そういう新潟大学小児歯科のやり方が



出来上がりました。

診療だけでなく、医局においても、富沢君の存在は大きなものでした。

彼女は、出産、育児、もちろん家事、そして診療や研究などの仕事と、見事にこなしました。協力したご主人と、育てられたお子さんは大変だったと思いますが……。

女性の医局員のパイオニアとして、それらのノウハウを、後に続いた女性たちに伝えてくれ、女性の医局員が働き易い職場が出来上がりました。また、子育てなどから得られた知識は、診療でも生かされ、これも新潟大学小児歯科の特色となりました。

「インジャンイ」彼女からよく聞いた言葉です。ずっと昔、創設期の頃に、教室事務の人が書いてくれたイラストです。それも、他の人のいう

ことを認める、多様性のある、モノトーンでない教室、教授から研修医まで、好きなことが言い合える、自由で楽しい研究室が出来たのも、多くの人が入局してくれたのも、彼女の「インジャンイ」のお陰でしょう。

富沢君の思い出は、他にもいっぱい、医局のスキー旅行の赤倉での骨折や、カラオケでの澄んだ歌声、スウェーデンのウメオ大学への留学など、さまざまなものがあります。

亡くなる2日前に富沢君を見舞いました。もう朦朧とした感じでしたが、ご主人が、僕が来たことを話すと、視線が定まらない目を大きく見開いて、手を僕の方に伸ばしてくれました。あの時の君の姿、富沢君の姿は、長く忘れないと思います。

いろいろの思い出も含めて、全てが感謝です。富沢君、富沢美恵子君、ありがとう。



富沢先生を偲んで

小児歯科診療室 大島 邦子

平成16年に新設されました本学歯学部口腔生命福祉学科教授で学科長もつとめられた富沢美恵子先生が、平成22年11月5日午後1時05分膵臓癌で逝去されました。11月8日午後7時よりお通夜が、同9日午前10時より告別式が、新潟市青山セレモニーホールで行われ、多くの本学教職員・学生および卒業生・同窓生が参加し、あまりにも突然の悲しみの中、ご冥福の祈りを捧げました。

富沢先生は、本学歯学部5期生で、しかも初の女性教授に就任され、ある時は教授として、ある時は先輩として、またある時は母のように、姉のように、私たちを優しく叱咤激励してくださり、私たちにとって、とても頼れる存在であり、尊敬する存在であり、女性教員の希望の星でした。

富沢先生は、本学ご卒業の後、口腔外科に入局され、その後、現小児歯科学分野に移籍されました。私が入局した当時、富沢先生は講師として、野田忠教授（当時）の片腕として、ご活躍されておられました。外来では、長く美しい指がしなやかにスリーウェイシリンジをぐるりと回すしぐさに思わず見とれたり、外来小手術で見せる、目にもとまらぬ速さの処置や縫合に息をのんだり、セミナーで理路整然とお話しされる姿に私たち新人

はあこがれ、同期生と「20年くらいしたら、私たちも富沢先生みたいになれるのかな」「無理無理」と話していたことを思い出します。一方で、夕方、お腹がすいたなと思っていると、富沢先生がおせんべいの袋から「食べる？」とたくさんのおせんべいを無造作に出してくださったり、医局の送別会や、全身疾患の患者様が亡くなられたという連絡が入った時に、人目もはばからずに、泣いているお姿など、外来での凜としたお姿とはまた違う、人間性豊かな、温かなお人柄も感じられました。

その後、富沢先生はスウェーデン・ウメオ大学に単身留学され、海外に多くのご友人を作られ、その後も頻繁に国際学会で研究発表をされ、小児歯科の医局員にも海外発表の機会を与えてくださいました。口腔外科ご出身であること、ご主人が小児科医であることから、全身疾患、軟組織疾患、口腔外科的処置、病理組織所見に精通され、特に留学後は「論文は英語で書かないと意味がない」と精力的に論文を発表されました。流ちょうな英語で楽しそうにご友人とお話しされるお姿、海外ではスーツケースいっぱいにおみやげを買われるお姿、また、留学の際に日本に残していかれたご長男のことを、目を真っ赤にしてお話しされたお



姿も今でもはっきり覚えています。

富沢先生は、お仕事で多忙を極めていらしたにもかかわらず、良き家庭人でもありました。ご主人のこと、息子さんのこともよく話して下さいました。お料理もお得意で、お家を建てられた時には、医局員を招いて手料理をごちそうして下さいましたし、家庭菜園もなさっていました。医局でもお昼に「昨日つくった残り」と言いながらおいしそうなロールキャベツなどを召し上がっていました。

いつも明るく、前向きで、私たちが迷っていると、「いいんじゃない」と、ポンと背中を押してくれました。口腔生命福祉学科の教授に就任されてからも、学科のために奔走されながら、ずっと小児歯科のことを気にかけていて下さいました。私たちも、ことあるごとに、先生のお部屋に伺って、ご相談にのっていただきました。いつまでも、

先生に頼ってきました。こんなに突然にお別れが来るとは思いもせずに。

術後、栄養がとれずにどんどん痩せていかれ、コーラス部で鍛えた美しい張りのある声も聞かれなくなっても、ぎりぎりまで講義・実習や、院生の論文指導をされていました。責任感の強い先生らしい最後でした。

ご病気がわかってから、1年足らず。何の恩返しもできないままでした。わがままと分かりつつも、まだまだたくさんを先生から教えて頂きたかったです。あまりにも早すぎました。「しっかりしなさい。あとは頼んだわよ。」という先生の元気な声が天国から聞こえてきそうです。

結局、入局して20年以上たっても、やはり先生のようにはなれませんでした。でも、天国の先生にご心配をかけないように頑張っています。

心からご冥福をお祈りいたします。

